

# 經濟論叢

第九十六卷 第四號

---

- J. R. Hicks の「平均期間の理論」……………佐 波 官 平 1
- 第三のカザノーヴァ (4)……………穂 積 文 雄 21
- 資本主義經濟の  
「適應能力」理論の發生過程……………池 上 惇 48
- 租税利益説の衰退……………北 條 喜 代 治 64
- 

昭和四十年十月

京 都 大 學 經 濟 學 會

### 第三のカザノーヴァ(4)

穂 積 文 雄

#### V

これまで、わたくしは、ロッセリーの世界におけるカザノーヴァを、ながめてきた。しかしながら、それは、カザノーヴァが、いかにロッセリーの舞台上に登場し、いかにロッセリーの世界で活躍したかを、ながめるにとどまる。いかにロッセリーの舞台より退場するかは、まだ、ながめるにいたっていない。したがって、わたくしは、これより、すすんでそれをながめなければならない。それが、ものの順序というものである。そうかんがえられる。それは、もっともである。だが、この場合は、そうするわけにはまいらぬ。そうすることが、かならずしも、もっともではないのである。なぜ。それは、こうである。このエッセイは、もと、第三のカザノーヴァのプロフィールをうかがうことを目的とする。それは、すでに、はじめに、ことわっておいたところのごとくである。そして、第三のカザノーヴァは、ここでは、経済人としてのカザノーヴァを意味する。それも、また、すでに、あきらかにしておいたところのごとくである。しかるに、経済人としてのカザノーヴァの世界は、ひとり、ロッセリーの世界にかぎらない。他の世界にもわたる。そうだとすれば、われわれは、その他の世界におけるカザノーヴァをもながめなければならないことになる。それは、いうまでもないところである。しかも、カザノーヴァのロッセリーの舞台よりの退場のよってきたる因由は、実に、その、他の世界における事情に胚胎する。それは、後にあきらかとなるところのごとくである。そして、これらのことがらは、われわれをして、しばらく、ロッセリーの世界を後にし、去って、その、他の世界におけるカザノーヴァをながることを、もっともと、せしめるに足る。そうかんがえられる。だから、わたくしは、そうする。

それでは、その、他の世界はいかなる世界であろうか。それには二つある。一つは証券取引の世界。いま一つは工場経営の世界。

まず、証券取引の世界におけるカザノーヴァからながめよう。いま、「回想録」からひき出してみると、大約、つぎのごとくである。

カザノーヴァには画家の弟があった。その弟は、しかし、パリでは、そのうでをみとめられるにはいたらなかった。かれは、4年間、ドレスデンで、絵の修業にはげんだ。有名な絵画博物館 (la fameuse galerie électorale) のすぐれた戦争画は、のこらず、模写したものである。その弟が、ドレスデンからパリにやってきた。カザノーヴァより1月あとのことである。だから1757年の2月はじめということになる。だいぶうでをあげたにちがいない。カザノーヴァに会って、こういつている。「わたくしは、もう、たれの庇護をもたのまない。たのむのはわたくしのうでだけだ。フランス人は、かつて、わたくしをみとめてくれなかった。かれらに、それを、のぞむのが大きなまちがいだつたのだ。なぜなら、今日、もし、わたくしが、あのときのままのわたくしにすぎなかったら、わたくしじしんだって、みとめはしないだらうから。だが、いまなら、かれらからでも、りっぱにみとめてもらえるとおもっている」と。そして、事実、このたびは、かれは、みごとな絵をかいた。そして、ルーヴルで展覧会をひらいた。そして、喝采を博した。アカデミーはかれの戦争画を12,000フランで買いあげた。かくてかれは、一躍、戦争画家として、有名になった。そこで、かれは、この年、結婚した<sup>1)</sup>。その結婚式にカザノーヴァが出席したことはいうまでもあるまい。ところが、その式場で、カザノーヴァは、これも、おなじく、その結婚式に出席したコルヌマン氏 (M. de Corneman) と相識った。コルヌマン氏は銀行家 (le banquier) であった。かれはカザノーヴァに、こころひかれるものがあった。そこで、かれは、カザノーヴァに、フランス当時の財政金融についてかたった。その内容は、しばらく、「回想録」によれば

1) *Mémoires*, III, ix, pp. 200-201.

つぎのごとくである。

かれは、わたくしに、通貨の欠乏の大なること (la grande disette d'argent) を滔々と述べ、その対策を講ずるよう財務總監に説いてくれ、と、わたくしにうったえた。かれは、わたくしに、いう。国債 (des effets royaux) を、アムステルダムの商人の団体 (une compagnie de negociants d'Amsterdam) に適正な価格で (à un prix honnête) 売却し、それとひきかえに、どこか、他の、フランスよりは信用のある国の、すぐ現金にすることのできる債券 (papiers) を獲得することができます、と。わたくしは、かれに、それを、たれにもはなさないように、たのんだ。そして、運動することを、かれに、約した。

このかんがえ (idée) は、わたくしをよろこばした。わたくしは、その日、一晚中、そのことをかんがえつづけた。結局、わたくしは、翌日、早速、ベルニ氏と相談するために、ブルボンの邸におもむいた<sup>2)</sup>。

ベルニ氏も、このかんがえをすばらしいとみとめる。そこで、ベルニ氏のかんがえはこうである。カザノーヴァはショアズール氏からラ・ヘイ駐割大使・アフリ氏 (M. d'Affri, ambassadeur à La Haye) えの紹介状をもらって、オランダに行く。アフリ氏のもとえ、何千万かの国債が送付される。それをカザノーヴァが有利に割引する (les escompter suivant l'avantage)。それにしても、まず、ブローニ氏にはかるがよい。ただし、よわきなふるまい (l'air d'un homme qui irait à tâtons) は、この際、とくに、みせてはならない。かねというわけにはいかないが、紹介状なら、必要なぎり、いくらでも、出そう<sup>3)</sup>。

そこで、カザノーヴァは、あすといわず、その日ただちに、ブローニをたずねる。ブローニも、また、このかんがえを「大変に結構」(très-bonne) という。そして、カザノーヴァにいう。ショアズール公は明日廃兵院 (les Inva-

2) *Ibid.*, III, xiii, p. 299.

3) *Ibid.*, pp. 299-300.

lides) に行くことになっている。いま、これから手紙を書いてあげるから、あなたはそれを、即刻 (*sans perte de temps*)、かれにてわたして、はなさねばならない。じぶんは、国債 2,000 万を、遅滞なく、われわれの大使へ送付するようとりはからう。しかし、もし、君が、わたくしの期待するような成果をあげることができない場合には、それらの国債はフランスに返送されることになるであろう。

これに対し、カザノーヴァは、適当な価格で満足が得られるなら、国債の返送ということにはならないでしょう、と、こたえる。

プーローニユは、さらに、いう。戦争はちかいうちにやむことになる。それは確実だ。だから、君は、きわめてわづかの損失で、売却しなければならない (*il ne faut vous en défaire qu'à très-peu de perte*)。だが、この点については、大使とはなしあいなさい。必要な訓令は万事、大使のもとえとどける<sup>4)</sup>。

それからさきは、カザノーヴァみづからのしるすところを、そのまま、引くことにしよう。こうある。

わたくしは、この使命 (*cette commission*) で、とても、得意になった。そのため、それをかながえて、一晚中ねないで、夜をあかした (*je passai la nuit blanche à y réfléchir*)。わたくしは、アンバリードへ行った。シュアズール氏は、たくさんのしごとをてっとりばやくかたずけることで有名である (*fameux pour aller vite en besogne*)。プーローニユ氏の手紙をみるがいなや、わたくしと、この問題について、しばらくはなし、それから、アプリ氏への手紙をつくらし、それを、よみ、わたくしによんできかせずにそれに署名し、封がおわると、すぐ、それを、わたくしに、てわたし、一路平安をいのる、と、いってくれた (*il...me souhaita un bon voyage*)。

わたくしは、いそいで、ベルケンロード氏 (*M. Berkenrode*) から旅券をもらい、即日、……わたくしの事務所の券 (ロツテリーの券のこと—訳者) のす

4) *Ibid.*, p. 300.

5) *Ibid.*

べてに署名する権限をわたくしの信用している事務員にあたえた<sup>5)</sup>。

デュルフェ夫人は、カザノーヴァがフランスのために (pour le bien de la France) オランダに行くことをきくと、ゴータンブールのインド会社の株券の若干 (plusieurs actions de la compagnie des Indes de Gothembourg) をかれに托し、売ってくれ、と、依頼した。かの女は、その株券を6万フランもっていた。しかし、それをパリ取引所 (la Bourse de Paris) で売ることができなかった。そこにかね (l'argent) がなかったからである。さらに (en outre) その利子 (l'intérêt) をしはらおうとしなかった。利子はかなりの額になっていた。と、いうのは、配当 (dividende) のしはらいがとまって、すでに、3年におよんでいたからである<sup>6)</sup>。

カザノーヴァはコルヌマンの家によった。コルヌマンはカザノーヴァにラ・ヘイの宮庭にでいりするイスラエル人銀行家ボーツ氏 (M. Boaz, banquier israélite de la cour à La Haye) えあて3,000 フローラン (florins) の為替手形 (une lettre de change) を1通ふり出してあたえた。それから、カザノーヴァは、すぐ、出発した。そして、2日後に、アンヴェル (Anvers) に到着した。そして、まさに出帆しようとしていた1隻のヨットをみつけ、それに搭乗、翌日は、はや、ロッテルダムでベッドに入った。その翌日、カザノーヴァはラ・ヘイにおもむいた。そして、そこで、イギリス・ホテル (l'hôtel d'Angleterre) に、宿をとり、アフリ氏を訪問した<sup>7)</sup>。そこで、その模様を、また、カザノーヴァから直接に、きくことにしよう。

わたくしがついたとき、かれは、ちょうど、ショアズール氏から、かれに・わたくしに委任されたしごとを傳達した・手紙をよんでいるところであった。かれは、わたくしをひきとめ、コーデルバック氏 (M. de Kauderbac) をまじえて、食事をした。コーデルバック氏はザクセン選挙侯ポーローニエ王の駐在員 (résident du roi de Pologne électeur de Saxe) であった。ア

6) *Ibid.*, p. 302.

7) *Ibid.*, pp. 302-303.

フリ氏は、うまくおやりなさいといって、はげましてくれた。しかし、同時に、こういった。「じぶんは成功をあやぶむ、そのわけは、オランダ人は、平和は、そうはやくは来ない、と、いみじくも信じている (les Hollandais avaient de bonnes raisons pour croire que la paix ne se ferait pas de sitôt) からである」と<sup>8)</sup>。

大使のもとを辞したカザノーヴァはポーズ氏のもとえおもむく。ポーズ氏はカザノーヴァの持参した手紙を読んで、カザノーヴァにむかって、いう。「いま、コルスマン氏からの手紙を読んだばかりのところですよ。コルスマン氏はあなたのことを、とても、ほめています」と。そして、カザノーヴァをよろこばそうとして、つづける。「今日は、ちょうど、クリスマス (la veille de la Noël) ですから、きっと、これから、イエスさまのおもりをなされることでしょう」(bercer l'enfant Jésus) と。しかし、カザノーヴァは、こたえていう。「いえ、わたくしは、あなたと、御一緒に、マカベーのおまつりをおいしましょう (célébrer... la fête des Machabées) とおもって、やってきました」と。ポーズ一家は、これをきいて、喝采する。そして、カザノーヴァに、じぶんたちの家に泊まってくれともうしでる。カザノーヴァは、早速、そのもうしいでをうける。そして、じぶんのとももの (laquais) に、荷物をこの銀行家のところにはこぼさせる。そして、わかれるまえ、かれに、「しばらくではあるが、オランダに滞在するつもりです。その間に、なにか有利なことで2万フローランほどもうけさせて、ください」(me faire gagner une vingtaine de mille florins dans quelque bonne affaire) と、たのむ。

相手は、それを本気にうけとり (prenant la chose au sérieux) 「よくかんがえてみましょう、むづかしいことではありません」と、ひきうけてくれる。

翌朝、カザノーヴァは、ポーズ氏と、朝食を、ともにする。朝食がおわると、ポーズ氏はカザノーヴァにむかって、「わたくしのところに、あなたにもってこいことがあります。いらっしゃい。そのことについて、おはなしもうしあ

8) *Ibid.*, p. 303.

げましょう」という。

そういって、かれは、カザノーヴァを、じぶんの事務室 (son cabinet) につれてゆく。そして、そこで、金貨と手形で (en or et en billets de change) 3千フローランの勘定をすましてから、カザノーヴァにむかっていう。あなたしだいで、1週間で、あなたのおっしゃっていた2万フローランがもうけられますよ (il ne tenait qu'à moi de gagner en huit jours les vingt mille florins dont je lui avais parlé — 原文は、カザノーヴァが間接話法で述べている。だから、訳文の第2人称が原文では第1人称になっている、一訳者)、と。

カザノーヴァは、オランダでは、そのように、たやすく、かねもうけができることに、おどろく。それというのも、カザノーヴァは、ただ、ユダヤ人からかってみただけに、すぎなかったからである。そして、この好意のしるしに対して、あつく謝意を表し、みみをかたむける。

「ここに」とポーズ氏はいう。「1昨日造幣局 (la Monnaie) からきた書面 (une note) があります。鑄造したばかりの40万デュカ (ducats) を金の時価で (au prix courant de l'or) で売りたいと、いっています。さいわい、現在、金の価格はたかくありません。1デュカが、5フローラン・2スチューペー100分の3です<sup>9)</sup>。ここにマインのフランクフルト (Francfort-sur-le-Mein) の為替相場表 (cours du change) があります。40万デュカを買いなさい。そして、アムステルダム払い為替手形 (des lettres de change sur Amsterdam) にして、マインのフランクフルトに、携行するか、送付するか、しなさい。これがもうけです。あなたのもうけは、1デュカにつき、1スチューペー・9分の1になります。すなわち、あなたのもうけは、わがフローランにして、2万2千2百2です。今日この金を、しっかりと、おつかみなさい。1週間後には、あなたのもうけは現金 (liquide) になります。そして、それは、あなたのものです (vous voila servi)。

カザノーヴァは、ここで、まよいがさめる (revenais d'un peu loin)。「し

9) *Ibid.*, pp. 303-304.



かし」とかれは、ポーズ氏にむかって、いう。400万以上にも上ぼる額のツールノア (tournois ツール Tours で鑄造された貨幣—訳者) をわたくしにあづけるのは、造幣局のひとつたちにとって、すこし、むづかしくはないですか。

それから、会話は、つぎのごとく展開する。

——もちろん、あなたが、現銀 (argent comptant) で買われるか、または、それに相当する額の優良な証券を提供されるのでなければ、むづかしいでしょう。

——わたくしには、そんな額も、そんな信用も、ありません。

——その場合には、あなたは1週間で2万フローランおもうけになることは、とうてい、できません。あなたが昨日わたくしになさったおもうしいで (la proposition) をうけたまわって、わたくしは、あなたを百万長者 (millionnaire) とおもっていました。

——御期待をうらぎって、まことに、おきのどくに存じます。

——この件は、今日、わたくしの子供たちの中のだれかにやらせましよう<sup>10)</sup>。

これはカザノーヴァにとっては、ちょっときびしい教訓であった。そのことは、カザノーヴァも、これをみとめている<sup>11)</sup>。

アフリ氏はカザノーヴァをイギリス・ホテルにたづねる。しかし、カザノーヴァが不在だったので、おきてがみをしてかえる。手紙の内容は、じぶんの家ですごしてくれるように、というものである。そこで、カザノーヴァは、アフリ氏のもとにおもむく。アフリ氏は、カザノーヴァを引きとめて、昼食をとみにし、いまして、ブローニュ氏からの手紙をうけとったと、つたえる。その手紙は、平和のとりきめが、まさにむすばれようとしているおりであるから、カザノーヴァに8分以上の損失では、(à plus de huit pour cent de perte) 2,000万をてばなさせないようにと、ブローニュ氏よりアフリ氏に依頼

10) *Ibid.*, p. 304.

11) *Ibid.*

してきたものであった。2人は、パリの役人 (un administrateur) のいづくあまりにも滑稽な確信にはらをかかえて大笑いをする。かれらは、利害関係によって、目がひらかれ、事情がよくみえる国にいるおかげで、まったく正反対のみとおしをしていたのである<sup>12)</sup>。

アフリ氏はカザノーヴァがイスラエル人のところにとまっているのをしると、ユダヤ人に心をゆるしてはいけない、なぜなら、商業においては、もっとも正直なひとでも、かたりにちがいない (le plus honnête n'est que le moins fripon) のだから、といい、さらに、ことばをつづけて、「もし、おのぞみならば、アムステルダムのベル氏 (M. Pels) への紹介状をさしあげましょう」という。カザノーヴァは、ありがたく、それをうける。また、かれのゴータンブールの株式の件で、役立つようにと、スエーデンの大臣 (ministre de Suède) に、カザノーヴァを紹介する。このものは、カザノーヴァをO氏 (M. d'O) のところにさしむける<sup>13)</sup>。カザノーヴァはその「回想録」においては、実名をさけてO氏といっているが、後の学者は、それを、トーマス・ホープ (Thomas Hoop) と考証している<sup>14)</sup>。

その日は、カザノーヴァは、サン・ジャンの冬まつり (la fête de la Saint-Jean d'hiver) のための秘密結社の大会 (la grande réunion maçonnique) に列席するため滞在し、その翌日、アムステルダムにむかう。そして、日のくれかたにつき、エトワール・ドリアン (l'Étoile d'Orient) に投宿。その翌日、取引所におもむき、ベル氏に会う。ベル氏はカザノーヴァに、カザノーヴァのしごとを考慮しましょうという。同時に、O氏にも会う。O氏は、カザノーヴァをゴータンブールの仲買人にひきあわしてくれる。その仲買人は株式16を1割2分の利息をつけて買おうともうし出る。ベル氏はカザノーヴァに、しばらく

12) *Ibid.*, p.p. 304-305.

13) *Ibid.*, p. 305.

14) Hermann Kesten, *Casanova*, Translated by James Stern and Robert Pick from the German original, New York, 1955, pp. 233-234.

まで、といい、じぶんが1割5分確保しようと約束する<sup>15)</sup>。

カザノーヴァは、O氏の家にまねかれ、やがて、両者の意気投合、O氏の家に厄介になることとなる<sup>16)</sup>。

O氏はカザノーヴァに、もうし出る。いわく、「あなたが例の債券を1割5分ですばなされるなら、わたしが、ひきとりましょう。そうすれば、あなたは、仲買人 (courtier) と公証人 (notaire) の費用 (frais) がはぶけます。そして、わたくしは、よい時機をまって、てばなします。」カザノーヴァはこのもうしいでを有利と判断し、即座に手をうち、私署して売りわたしをすましたる (avoir fait la vente sous seing privé) 後、為替手形をくむ (pris une lettre de change à mon ordre sur Tourton et Baur)。ハンブルグの為替相場によれば、7万2千フラン得ることになる。一方、5分では、6万9千しか期待できない。この利益は、おそらく、そこまで、カザノーヴァの誠実を期待してはいなかった夫人の、カザノーヴァに対するおぼえを最高にすることになる<sup>17)</sup>。

一方、ペル氏は、カザノーヴァを、じぶんの別荘にまねぎ、深夜まではなす。そして、かれにいう。「すでに、わたくし、および、O氏の友人となられた以上、大きな問題について、ユダヤ人の手を通ずるようなことをしてはいけません。われわれに、率直に、おはなしなさらねばなりません。」このもうしいれはカザノーヴァの気にいる。「これは、財政におけるみならい小僧にとっての多くの困難をとりはらってくれた」。そう、カザノーヴァは、述懐する<sup>18)</sup>。

カザノーヴァはラ・ヘイに行き、多数の手紙をうけとる。その中の1通は財務総監からのものであった。そしてそれには、2千万の国債はアフリ氏のてもとにあること、アフリ氏は8分以上の損失で (à huit pour cent de perte) それをてばなしてはならないこと、が、しるされていた。いま、1通は、ペルニ氏からのものであった。そして、それには、つぎのことがしるされていた。い

15) *Mémoires*, III, xiii, pp. 305, 307.

16) *Ibid.*, p. 313.

17) *Ibid.*, p. 316.

18) *Ibid.*, p. 317.

わく、できるかぎりの最大の利益をあげよ。いわく、つぎのことは確実とおもってよい、大使は、大臣に通報すれば、取引締結を許可すべき訓令を、受けとる、ただし、バリ取引所で得られる価格以下であってはならない<sup>19)</sup>。

ボーズはカザノーヴァがゴータンブル社の株券16を売却したのにおどろく。かれは、カザノーヴァにむかっていう。「あなたに、もし、フランスの国債を1割の損失で(*à dix pour cent de perte*)売却し、スウェーデンの証券(*les actions suédoises*)を、あなたがあなたの16を売られたように、1割5分高で(*à quinze au dessus de cent*)うけとることを約束され、その書類に、大使が署名するようになさるお気があるなら、わたくしは、あなたのために、あなたの2千万をスウェーデンのインド会社の株券(*actions de la compagnie des Indes suédoise*)で買うのに、ひとつ、大いにちからをつくしましょう。」カザノーヴァは、もし、ボーズ氏が、3ヶ月の期間を要求せず、そして、また、その間に平和が回復した場合でも契約は変更されることができないということを、要求しなかったなら、かれのもうしいでに承諾をあたえたであろう、といている。しかしながら、カザノーヴァは、やがて、アムステルダムに行かねばならない、と、さとの<sup>20)</sup>。

その翌日のまた翌日、カザノーヴァはデュルフェ夫人より1通の手紙と、為替手形をうけとる。為替手形は、ボーズ氏あてにふり出されたもので、額面は1万2千フラン。手紙の中で、かの女はいう。「あの証券は、じぶんにとっては6万フランのねうちしかない。じぶんは、あれでもうけようとは、おもわない。この仲介料を友愛をもって(*courtage d'amitié*)おさめていただければうれしいが。」「この提供は」と、カザノーヴァはしるしている。「あまりにも、けだかかったので、わたくしは、それを拒絶しなかった。」<sup>21)</sup>

ボーズ氏はこの1万2千フランをカザノーヴァに、デユカ貨でしはらう。「このことにより」と、カザノーヴァは、しるしている。「ボーズ氏は、わた

19) *Ibid.*, III, xiv, pp. 321-322.

20) *Ibid.*

21) *Ibid.*, p. 328.

くしの友人となった。なぜなら、かれは、この好意は、うたがいもなく、かれに、いくらかの利益をもたらし、そして、かれは、それを、わたくしに感謝したからである。と、いうのは、オランダでは、金は一の商品であり、あらゆるしはらいは、すべて、銀貨 (*argement blanc*)、あるいは、紙幣 (*papier*) でおこなわれるからである。そして、ちょうどこのとき、うちぶ (*l'agio*) は、すこしばかり上がっていたから、デュカ貨をほしがるひとはいなかったのである。』<sup>22)</sup>

そのあと、かれは、カフェーに入り、そこで、賭博をする。そして、1人のわかものとはたしあいをして、あいてにきづを負わせる。その夜おそく、かれはポーズ氏の家にかえり、ポーズ氏に、そのはなしをする。ポーズ氏はすぐさま、アムステルダムに行くよう、カザノーヴァにすすめる。カザノーヴァはその翌日出発する予定であった。しかし、ここで、急に予定を変更、深夜にもかわらず、ポーズ氏のくるまで出発。まよなかにアムステルダム着。ビエニユ・ビーブル (*l'auberge de la Vieille-Bible*) に投宿する<sup>23)</sup>。

この事件は1週間後まで、アムステルダムには、つたわらなかつた。カザノーヴァは、そのことをよろこんだ。かれは、こう、しるしている。「これはさいわいであつた。なんとなれば、このできごとは、たいしたことではないけれども、わたくしに損害をあたえずにはおかないからである。と、いうのは、決闘ずきという評判は、これから、なにか重要なとりひきをとりむすぼうとする相手方の商人たちに対するよい推薦状では、けっして、ないからである。』<sup>24)</sup>

数日たって、O氏はかれがベル氏および他の割引銀行6社のものとの2千万の国債についての会談の結果をカザノーヴァにつたえる。かれらのもうしいでは、現銀1千万、5分乃至6分利附債券7千万、仲介手数料1分除除、(*dix millions argent comptant, et sept millions de papier qui donneraient cinq et six pour cent, avec un rabais d'un pour cent de droit de courtage*)、さらに、フランス・インド会社 (*la compagnie des Indes française*) がオラ

22) *Ibid.*

23) *Ibid.*, pp. 328-330.

24) *Ibid.*, p. 330.

ンダ会社 (la compagnie hollandaise) に対する負債120万フローランを放棄するという。「この条件は」と、カザノーヴァはしるしている。「ルイ一五世のそのときの財政状態にてらせば (vu la pénurie où se trouvait le trésor de Louis XV à cette époque) いかにも、もっともなものである、と、わたくしは、おもうのであるが、この条件では、わたくしには、ひきうけることができない。わたくしは、早速、このもうしいでのうつつしを、ブーローニユ氏とアフリ氏におくって、至急の返事をもとめた。1週間して返事をうけとった。ブーローニユ氏の命によるクルトイユ氏の手からのものであった。それは、このようなもうしでは、きっぱりとことわり、もし、よりよいとりひきをみいだすことができなければ、パリにかえれ、と、いうものであった」<sup>25)</sup>。

カザノーヴァは、おそらく、すぐ、パリに、ひきかえしていたことであろう。しかしながら、ある運命のいたづらが、かれがそうすることを、さまたげた。そのいきざつは、こうである。

これよりさき、O氏のむすめのエステル (Esther) が、カザノーヴァのオラクルに帰依していた。たまたま、O氏の大切な書類カバンが紛失する。それをカザノーヴァがみつける。しかし、そのことを秘し、オラクルでその処在をあてる、というインチキをやる。それで、O氏も、また、ふかく、カザノーヴァのオラクルに心酔することになる。おりから、インド会社の1隻の船 (un vaisseau de la compagnie des Indes) が出港の日時はわかっているのに、その後、杳としてゆくえがしれず、当然つくべきはずのところ、2ヵ月おくれでもついていない。そこで、すでに沈没したものと推測されるにいたった。真偽は別として、イギリスの商船の一船長の、その船が海洋のまっただなかで沈没するのをみたと報ずる手紙さえあったくらいである。O氏は、カザノーヴァのオラクルで、その運命をうらなった。ところが、無事と出た。そこで、O氏は、単独でその船を、積荷もろとも、30万フローランでひきとることにした。ところが、うしなわれたとおもわれていた船はマデイラ (Madère) にいた。そ

25) *Ibid.*, p. 346.

の報が取引所にはいった<sup>26)</sup>。

○氏は大もうけをした。かれはカザノーヴァにもうけの1割を提供する。それは2千万フランにおよんだ<sup>27)</sup>。夢のようなはなしである。たれでも、まゆづばものとおもうであろう。さすがに、カザノーヴァも、それが気になったのであろうか。かれはここで、つぎのごとき弁を弄している。

多くの読者は、きっと、ほんとうにはしないであろう。しかしながら、この回想録は、わたくしが、もはや、この世にいらなくなってから、はじめて目の目をみるのであるから、わたくしは、真実をつつみかくすことにおいて、なんらの利益をもたない。いわんや、わたくしが筆をとるのは、ただ、わたくしのつれづれをなぐさめるためにすぎぬのであるから、なおさらである。しるひとぞしる……<sup>28)</sup>。

これはカザノーヴァが、ブローニュ氏の手紙をうけとった日より3日まえのことである。○氏は、ここで、かれに、オランダにおちつき、事業をともにしようとする<sup>29)</sup>。しかしながら、かれは、パリにかえらぬわけにはいかない。

それから1週間の後、2千万の件について、○氏より最後のもうしいでがなされる。それによれば、この額の売却において、フランスの損失は、ただ、9分にすぎず、カザノーヴァは仲買料をとらないことになる。カザノーヴァは、ただちに、このとりひきのうつしをアフリ氏にとどけ、費用はじぶんが出すから、遅滞なく、財務総監に伝達するよう、依頼し、さらに、手紙をかいて、いう。「わたくしにとって締約に必要な資格を附与する全権を、アフリ氏にあたえることが、1日でもおくれると、とりかえしがつかないこととなります」と。カザノーヴァは、同様の趣旨の手紙を、財務総監およびシヨアズール氏へも、書く。そして、かれらに予告していう。「このとりひきにおいて、おわたくしは1文も

26) *Ibid.*, pp. 331-346.

27) *Ibid.*, pp. 346-347.

28) *Ibid.*, p. 345.

29) *Ibid.*, p. 347.

とりません。しかしながら、わたくしがみて有利とおもわれな<sup>い</sup>と<sup>り</sup>ひ<sup>き</sup>は、  
け<sup>っ</sup>して、とりむす<sup>び</sup>はいたしません。また、わたくしの費用は、ベルサイユ  
にて返済されるものと確信しています。その場合には、わたくしは、わたくし  
の期待する権利のある手当 (l'indemnité) を拒否はしないでしよう」と<sup>30)</sup>。

この「最後のもうし<sup>い</sup>で」を発送してから、12日を経て、プーローニュの手  
紙がとどく。手紙はカザノーヴァに、アフリ氏には、カザノーヴァが2千万の  
と<sup>り</sup>ひ<sup>き</sup> (l'échange des vingt millions) を締結するために、カザノーヴァ  
が欲することあるべきあらゆる訓令があたえられていることを、つたえる。ア  
フリ氏も、また、一書をカザノーヴァによせて、財務総監の言を確認する。そ  
して、カザノーヴァにつたえていう。「だが、うまくやりなさいよ。なんとな  
れば、国債のひ<sup>き</sup>わ<sup>た</sup>しは、正貨 (espèces courantes) で18,200,000 フランを  
得て、はじめて、おこなわれるのですから」と<sup>31)</sup>。

かくて、カザノーヴァは、いよいよ、オランダを出発、パリへ帰還の旅にた  
つ。このとき、かれは、非常に裕福な状態にあるじぶんをみいだす。ただし、  
かれのふ<sup>と</sup>こ<sup>ろ</sup>にはつぎのごとく、か<sup>ね</sup>が<sup>う</sup>な<sup>っ</sup>て<sup>い</sup>た<sup>か</sup>ら<sup>で</sup>あ<sup>る</sup>。さ<sup>き</sup>に<sup>の</sup>  
べ<sup>た</sup>○<sup>氏</sup>のポ<sup>ー</sup>ト<sup>フ</sup>ォ<sup>リ</sup>オ<sup>発</sup>見<sup>の</sup>際<sup>得</sup>た<sup>か</sup>ね<sup>が</sup>2千<sup>リ</sup>ー<sup>ヴ</sup>ル<sup>・</sup>ス<sup>タ</sup>ー<sup>リ</sup>ン<sup>グ</sup>  
(deux mille livre sterling)。○氏がカザノーヴァに提供したものが、ツール  
トン・ポールあて (sur Tourton et Baur) 為替手形、モンマルテルのパリあ  
て (sur Paris de Monmartel) の為替手形、あわせて10万フローラン、およ  
び、10万フローランの支払済証書 (quittance)。この支払済証書はカザノー  
ヴァに10万フローラン全額引き出しの資格をあたえるものである<sup>32)</sup>。

かくのごとくして、かれは、り<sup>っ</sup>ぱ<sup>に</sup>、使<sup>命</sup>を<sup>は</sup>た<sup>し</sup>て<sup>パ</sup>リ<sup>に</sup>帰<sup>還</sup>す<sup>る</sup>。と  
きに、2月10日<sup>33)</sup>。

かれがいかに成功をおさめたかは、以上の記述であきらかである。しかしな

30) *Ibid.*, p. 348.

31) *Ibid.*, p. 349.

32) *Ibid.*

33) *Ibid.*, p. 351.



から、かれの功績がいかに評価されたかをうかがうことも、意味のないことではあるまい。だから、わたくしは、それについて、なお、若干の引用をこころみるであろう。

カザノーヴァはパリへの帰途、ラ・ヘイにたちよりポーズをたづねる。ポーズは驚異・讃嘆をもってかれをむかえる。「かれは」とカザノーヴァはしるしている。「わたくしが、奇蹟を演じたといった。また、わたくしはパリへの帰心矢のごとしというところにちがいない。パリへかえれば、そこでは、祝福・称讃の満喫にあけくれであろう、といった。」<sup>34)</sup>

パリにかえりついたカザノーヴァが、まず、たづねたのは、パトロンのベルニ氏であった。そのときの会話をカザノーヴァはつぎのごとくしている。

——いつパリえ、と、大臣は、わたくしの手をとっていった。

——たったいま。郵便馬車 (ma chaise de poste) から降りたところです。

——早速ベルサイユへ行きなさい。ショアズール公と財務総監に会いなさい。あなたはこの上もなくりっぱにやりました。さあ行って、称讃をうけなさい。そして、それから、わたくしに会いに来なさい<sup>35)</sup>。

ポプリニェール (M. de la Poplinière) というものがいる。総括租税請負人 (fermier général) である。ちょうどこれより7年前、パッシー (Passy) にあるかれの家で、カザノーヴァは、かれに会ったことのある人物である。このかれが、ある機会に、カザノーヴァに会う。そして、かれは、カザノーヴァに、かるくおせじをのべてから、もし、カザノーヴァが、インド会社のために、あんなふうに、2千万もうけてくれることができたなら、かれは、カザノーヴァを総括租税請負人にしてやる、といい、さらには、ことばをつづけていう。

——カザノーヴァさん。わたくしは、ひとが、あなたが50万もうけたことを、しるまえに、フランスに帰化なさることをおすすめています。

——50万ですって、それがほんとうであれば、うれしいですね。

34) *Ibid.*, p. 350.

35) *Ibid.*, III, xv, p. 352.

——あなたのもうけが、これよりすくないはずはありませんよ。

——はっきりともうしますが、仲介料の権利が剥奪されたら、このとりひきで、わたくしは破産ですよ。

——あなたが、そう、おっしゃるのは、もっともです。それに、みんな、あなたにおちかづきになりたがっています。と、いうのも、あなたはフランスに大きな恩義をほどこされたからです。あなたは、ほんとに、好景気をひきおこしてくれましたよ<sup>36)</sup>。

早暁、カザノーヴァはベルサイユにでかける。シ ョアズール氏は最初のごとく、かれをむかえる。すなわち、理髪させながら、かれをむかえる。しかし、このたびは、たちまち、ペンを措いた。そのことは、かれの眼に、カザノーヴァが偉大となったことの証左である。かるく、あいそのよい、あいさつをした後、かれは、カザノーヴァに、4分で、借款1億 (un emprunt de cent millions de florins à quatre pour cent) のとりひきをする元気があるなら、カザノーヴァがそのとりひきをするのを支援するために、カザノーヴァに、りっぱな資格 (un caractère honorable) があたえられるように、とりはからおうという。

いかに、シ ョアズールがカザノーヴァをたかく評価したかを、しるにたろう。しかしながら、このはなしあいは、カザノーヴァが、「このたびわたくしがはたしたことに對していかなる報酬がいただけるかをみた上でかんがえましょう」とこたえたので、その結末は、つぎの会話のしめすがごときものとなる。

——だが、世間では、君は20万フローランももうけた、と、いっているぞ。

——それなら、わるくはないでしょう。50万フローランなら、さいさきよしですよ。ですが、わたくしは閣下に、はっきりと、もうしあげることができます。そんなことは、ありません (il n'en est rien)、と。それに、その証拠がすこしもありません。わたくしは、しろです。わたくしは仲介料の権利を主張することができる、と、おもいますか？

36) *Ibid.*, pp. 356-357.

37) *Ibid.*, pp. 357-358.

——そのとうりだ。財務總監のところえ行って釈明したまえ<sup>37)</sup>。

ブローニエ氏は、しごとの手をとめて、きわめて愛想よく、カザノーヴァをむかえる。だが、カザノーヴァが、50万フランもらわねばならぬ、と、いうと、かれは、皮肉な微笑をうかべる。そして、つぎの会話が展開する。

——わたくしは、あなたが10万エキュの一覽払為替手形 (lettres de change à votre ordre) の所持者であることを、しています。

——それは、そのとうりです。ですが、それは、わたくしのしたこととは、なんの関係もありません。それは、すでに証明されている事実で、それについては、わたくしは、アフリ氏におまかせします (je m'en rapporte à M. d'Aaffri)。さらに、わたくしは、王の収入を20万ふやす確実なもくろみをもっています。そして、それをしはらうものは、不平をいうはずはありません。

——それは、すばらしい！ 早速実行しなさい。そうすれば、国王から、あなたに、年金10万、それに、もし、あなたがフランス人となるつもりなら、貴族の称号も、あたえられるようとりはからうことを御約束いたします。

——それは、しばらくかんがえさせて、いただきたく存じます<sup>38)</sup>。

しかしながら、ここでカザノーヴァが、王室の収入を20万ふやし、しかも、それを負担するものが、不平をいうはずはない確実なもくろみというのは、一体、いかなるものであるのか。それは、ちょうど、カザノーヴァが、さきに、はじめて、ブローニエをたづねたときに、いったことと、かわるところがない。あのときには、かれは、「わたくしの胸中には一策があります。この策によれば、王に1億をもたらすことができましょう」といった<sup>39)</sup>。そして、「国民はよろこんで負担しますよ」と、いいきった。それと、ほとんど、ことなるところはな。さきの広言は、まさに、「うそからでたまこと」となり、結果的には、ロッセリーの成功によって、ほろを出さずにすんだからよいようなものの、その実は、でたらめであった。それは、かれみづから、みとめているところで

38) *Ibid.*, p. 358.

39) 本稿, I, 本誌, 96巻2号, 1965.

ある。そして、それは、われわれのすでにみたところである。しからば、このたびの言も、また、口からでまかせのでたらめではないのか。そう、うたがわれても、しかたのないところである。そういっても、よいであろう。しかしながら、このたびは、かれは、別に、そのことについて、なにも、いっていない。また、なにもしていない。それは、ただ、それきりでおわっている。いまにおいて、たづねるよしもない。しかしながら、それにしても、ブーローニュ氏が、早速、それにとびついて、やれ年金を出そう、やれ貴族にしてやろう、とさわぐところを見ると、ロッセリーの成功もさることながら、また、もって、このたびの証券取引がいかにみごとな成功であったか、おもいなかばにすぎるものがなければならぬ。そういっても、よいであろう。

だが、そればかりではない。カザノーヴァの成功は、マダム・ポンパズールの耳にまでも、入っている。

カザノーヴァはブーローニュ氏とさきの会話をした後、ブーローニュのもとを辞すると、その足で、ポンパズール夫人のもとにおもむいた。夫人はバレーのしたげいこをさせていた。しかしながら、カザノーヴァをみるがいなや、すぐ、かれに、えしゃくをし、かれの方にあゆみより、「あなたは、有能な仲介人 (négociateur) です」といい、また、「どこかのとのがたたちには、あなたのおうちをごぞんじになることができなかつたんですわ。」と、いった<sup>40)</sup>。この、言動のうちにも、また、このたびのカザノーヴァの成功が、いかに偉大なものであったかを、うかがはしむるに足るものがあるであろう。

## VI

人間万事かねの世の中、という。しかし、世の中はひろい。ひろいからひとも多い。多ければ、ひとさまざまということになる。「いつみても、わるい気のせぬやまぶぎいろ」と、いうひとでも、その動機は、かならずしも、おなじとは、かぎらない。ただ、ながめて、よろこぶにすぎぬものもいる。かれはか

40) *Mémoires*, III, xv, p. 358.

ねのために、かねを愛する。「もらうものなら夏も小袖」だが、「出すのは舌でもいや」ということにもなる。どうしても、かねにきたなくなる。「はいふぎとかかねもち」は、たまるほど、きたない」といわれるのも、かならずしも、理のないことではない、と、いわねばならないかもしれぬ。いわゆる守銭奴である。かれは、かねをつかうものではない。かねにつかわれているのである。まさに、文字どおり金銭の奴隷である。そういうものも存在する。

そうかとおもうと、その逆のものもいる。これは、また、つかう一方のものである。かねもうけはするが、それは、ただ、つかいたいからにすぎぬ。だから、よくつかう。ジャンジャンつかう。湯水のごとくつかう。つかうことに生きがいを感じるのである。だから、ただ、つかうことにのみ熱中する。いわゆる浪費家・濫費家とよばれるものである。そういうものも存在する。

だが、ためる場合は、いわずもがなである。つかうためには、まず、もうけなければならない。そして、もうけるためには、はたらかなければならない。はたらいっている中に、はたらくことがおもしろくてたまらぬというものもでてくる。事業ともなれば、なおさらであろう。そこで、事業にうちこむ。すると、ますます、おもしろくなる。おもしろくて、やめられなくなる。もう、かねは問題ではなくなる。すくなくとも、かねよりも、事業そのものに情熱をたぎらせることになる。いわゆる「しごとの鬼」といわれものが、これである。

かくて、ひとはさまざまである。

それではカザノーヴァはどうであろうか。

カザノーヴァは、いま、「財産をきづく」ことをころぎす。それは、われわれの、すでに、みたところのごとくである<sup>41)</sup>。そのかぎり、かれも人の児である。やまぶぎいろには、かれもわるい気はしないはずである。かねをほしがることにおいては、人後におちないであろう。しかしながら、かれは守銭奴ではない。かねに愛着・未練などありそうもない。文字どおわり、湯水のごとく、

41) 本稿、Ⅰ、本誌。96巻2号、1965。

ジャンジャンつかう。ことに、女性のためにする場合、とくに、はなはだしきをみる。そこには崇高なものを感じさせられさえる。それも、われわれの、すでにみたところのごとくある<sup>42)</sup>。すると、かれは、守銭奴とは縁がとおいものでなければならぬ。いな、とおいどころではない。まったく逆である。すると、かれは、浪費家・濫費家ということになるわけである。たしかに、そのとおりである。そういわなければならぬ。どうしても、そのタイプに属することをまねがれることはできないものごとくである。そう、おもわれる。げんに、カザノヴァの伝記作者たちは、しばしば、かれを、そうよんで、はばかり<sup>43)</sup>。

それでは、かれは、単なる浪費家か。かれは濫費家にすぎないか。そう、あらためて、かんがえてみると、かならずしも、そうあっさり、簡単に、かたづけられることはむづかしいことをする。なるほど、かれは、濫費家である。かれは浪費家である。それは、たしかである。それにちがいない。しかしながら、かれは、また、大なる活動家である。それは、いかなるかれの伝記作者も、みとめざるを得ぬところのものごとくである。まことにかれは活動家であった。

「一刻もじっとしておれなかった。<sup>44)</sup>いつも、なにかに夢中になっていた。何にでも興味をもつ。何にでも手をつけたがる。「回想録」にあらわれるかれをみよ。いつもたいてい、恋愛をしている。でなければ、かけごとをしている。そうでなければ旅行をしている。いな、その旅行の馬車の中で性愛三昧にさえふけている。してみると、かれは浪費家・濫費家ではあるが、単なる浪費家・濫費家ではない。しごとに熱中しうる型である。いわゆる「しごとの鬼」に属する型である。そうおもわれる。そのかれが、いまや、大金をもってパリへかえてきたのである。そのことは、さきにみたところのごとくである。いまや、

42) 同上。iv, 本誌, 96巻3号, 1965.

43) See, for example, Hermann Kesten, *ibid.*, p. 79. "Cassnova...was...an incorrigible spendthrift..." 小松太郎氏訳「カザノヴァ」上巻, (角川文庫版) 196頁, 「……かれは……手のつけられない浪費家で……」。

44) *Ibid.*, p. ix, xi, 小松太郎氏訳, 同上, 15, 17頁。

ありあまる金が、かれの手もとで、うなっているのである。かれが、それを、いだいて、じっとしていることができるであろうか。かれが、これをもって、うごきはじめることは、推察にかたくないところであろう。

では、かれは、いかにうごいたか。もちろん、恋愛にふけた。それは、いうまでもない。だが、それだけでは、つかいきれなかったはずである。そうかんがえて、さしつかえない。それなら、かれが、別の方面に、ひとしごとをはじめにいたったとしても、べつにふしぎではあるまい。はたして、かれは、はじめた。それが、工場の経営であったのである。

それでは、それは、いかに、はじめられたか。

しばらく、かれ、みずからのかたるところをきこう。かれは、いう。

すこしまえから、わたくしは、がらにもなく (comme malgré moi) 一つのおもわくのかんがえ (l'idée d'une pseculation) にとりつかれていた。このおもわくたるや、どう計算してみても、もうかるにちがいないようにみえた。絹のぬのぢの上に、捺染 (l'impression) によって、あらゆるうつくしいもようをつくりだすというところがみそである。リオンでおこなわれておるのは、はたおり (tissage) によるもので、のろくさくてむづかしかった。だから、捺染によればぐっとやすい価格で大なる売りあげが得られる、というのである。わたくしは、必要な化学の知識は、みなもちあわせていた。それに、この事業 (l'entreprise) の成功を確保するに足る資本も、もちあわせていた。わたくしは、こころえのあるひと (un homme instruit) と相談した。このひとは、技術のことも、経営のことも、こころえていた。そして、このひとが、その管理者 (directeur de l'établissement) になることになっていた。

わたくしは、わたくしの企画 (mon projet) を、コンチ公 (M. le prince de Conti) にしらせた。公は、実行せよと、わたくしを激励し、公の保護と、あらゆる特権 (toutes les franchises) を約束してくれた。それはもうしぶんのないものであった。これで、わたくしのはらはぎまった。

わたくしは、タンブル (Temple) の境内に1軒の広壮・美麗な家を、年1,000 エキュでかりいれた。この家には、わたくしの女工たちのみな (toutes mes ouvrières) がはたらくべき広大なひろま (une salle spacieuse), 店舗 (magasin) に利用されるべきいま一つの大きなひろま、わたくしの男工たちと使用人たち (mes ouvriers et les employés) をすまわすべきたくさんのおや (nombreuses chambres), そしてわたくしのための、とてもうつくしい住宅 (très-jolie appartement) があった。いかに、わたくしは、そこに身をおちつけたい熱望にかられたことか。

わたくしは、わたくしの企業 (l'entreprise) を30株 (trente actions) に分割した。わたくしは、その中の5を管理者になるべきもようのデザイナー (peintre dessinateur) にあたえ、25は、わたくしのでもとに保留した。資本をはらいこむ組合員 (les associés) に、その額に応じて贈与するためそうしたのである。

わたくしは、その中の一つを1人の医者にあたえた。この医者は、わたくしのために倉庫係り (gard-magasin) のしごとを保証してくれ、倉庫係りは家族全部をひきつれてやしき (l'hôtel) にうつり、すみこみ、わたくしは、下男4人 (quatre domestiques), 女中1人 (une servante) および門番1人 (un portier) をやといいれた。わたくしは株を、いま一つ、1人の簿記係り (un teneur de livres) にあたえねばならなかった。このものは、わたくしのために2人の筆生 (deux scribes) を職につけ、同様に、やしきに、うつり、すみこんだ。指物師 (menuisiers)・錠前師 (serruriers) および塗装工 (peintres) が数人、朝から晩まで、しごとをしてくれたので、3週間で、すっかり用意がととのった。彩色をすることに予定されている、わかいむすめたち (jeunes filles destinées à peindre) 20人をさがし出してくる労は、わたくしは、これを、管理者にまかせた。このむすめたちは、週末ごとに給料をうけとることになっていた。わたくしはマガザンに、タフタ (taffetas)・ツール絹布 (de gros de Tours) 300まき (pièces), その上に彩色もよう



——その選択はわたくしがにぎっていた——をほどこすためのいろいろの色の呉糸をおいた。わたくしは一切現金ではらった。わたくしは、管理者と概算をした。そして、売あげは1年後のこととしていたものだから、わたくしは30万フランしはらわねばならなかった。それは、わたくしには、こまることではなかった。いづれにしても、わたくしはわたくしの株券にたよることができた。そして、株券の売却は 確実であり、容易であった。しかしながら、わたくしは、その必要にせまられることは、けっして、あるまい、と、おもった。なんとなれば、わたしは、すくなくとも、収益20万フラン以下にねらいをつけてはいなかったからである。

なお、もし、売れなかったら、この事業のため、わたくしは破産するということを、わたくしはみとめる。しかしながら、わたくしの布地がうつくしいのをみ、また、それを、そのように安く売るといふ法はない、と、毎日きかされると、どうして、そのようなおそれをいだけようか。あらゆるものが、もっともうるわしい希望をはぐくむことにちからをかしているとき、それはむづかしいことである。

わたくしは、この店をひらくために、1月もたたぬ中に、約6万フラン支出した。そして、週1,200フランをこえる支出をせねばならなかった<sup>45)</sup>。

女工たちは、えりすぐり、みな、かしこく、つつしみぶかく、しとやか。それに、わかしくて、とりどりにうつくしいときている。すきもののカザノヴァは、かの女らにとりまかれ、かの女らをながめて、大満悦。かれは、かがやかしい・たくみに獲得された財産の上にきづかれた希望と多数のものに生存をあてているという意識で、自分というものが偉大になったようにさえみえる<sup>46)</sup>。

だが、事業はいかに進展したか。

われわれはかれが、やがて、つぎのごとくしるすをみることになる。

わたくしは王侯の生活をおくった。ひとはわたくしを幸福だとおもったか

45) *Mémoires*, III, xvii, pp. 417-419.

46) *Ibid.*, pp. 419-420.

もしれない。しかし、わたくしは幸福ではなかった。わたくしのなした巨額の支出、わたくしのけたはずれの大きな浪費、わたくしの快樂と豪華の熱愛は、わたくしをして、おそかれはやかれ、将来、いやなことがおこることを、いやでも、想見せしめずにはおこななかった。わたくしの工場 (manufacture) は、戦争の不幸が販売を麻痺せしめることがなかったならば、わたくしは、ながく、つづけて行くことができたであらう。しかしながら、必然的に、フランス全土をおそうた一般的不況 (la gêne générale) をくやまねばならなかった。わたくしは、わたくしの倉庫に、しあがった布地 400 まきをもっていた。しかしながら、平和になるまでは、それが売れることは、ありそうもなかった。そして、熱望の平和のみこみは、はるか先のことでなければだめであった。わたくしは破産の運命におびやかされていた<sup>47)</sup>。

破産の運命におびやかされたカザノーヴァは、すくいをO氏にもとめる。O氏は、工場をオランダにうつすなら一切をひきうけ、利益は折半にしようといってくる。しかしカザノーヴァはバりに未練がある。そのため、この有利な条件をのみかねる。そして、後悔する<sup>48)</sup>。

カザノーヴァは、工場の支出が大であるという。しかしながら、主たる支出、かれを破産に追いやった支出は、かれの女工たちのためのそれであった。そうカザノーヴァは述懐している。かれは、かれの女工たちをかたっぱしから誘惑し、かの女らと関係する。そして、いづれにも、せがまれるままに、家・家具・銀・宝石と、おしみなくふるまってやる<sup>49)</sup>。これでは破産するのもあたりまえというものであろう。破産しなかったら、それこそ、かえって、不思議ということになるのではないか。

かくて、11月のはじめ、カザノーヴァは、ついに株式を5万フランで売却。在庫製品の3分の1を譲渡。買手の選任する管理人を容認。その支払は組合の共同分担。買手、名はガルニエー (Garnier)。住所はメール路 (la rue de Mail)。

47) *Ibid.*, III, xviii, p. 430.

48) *Ibid.*, p. 431.

49) *Ibid.*

契約署名の3日後、かねを受領。しかるに、同夜、医師兼倉庫係りが金庫を開きことごとく盗略・逃走。カザノーヴァにとりては、まさに、晴天の霹靂。損害はかれにとり重大な打撃。これより、事件は紛糾。ガルニエー、カザノーヴァを告訴、5万フランの賠償を請求。カザノーヴァ管理者の責任を主張すれども無効。ガルニエー、ついに、カザノーヴァの財産に対し差押を強行。カザノーヴァ、女工および使用人を全員解雇。残留するものデザイナーただひとりのみ。カザノーヴァの弁護士背信。カザノーヴァついに獄舎に入所。デュルフェ夫人の救援により出所<sup>50)</sup>。

この結果、カザノーヴァ、ついに、パリ離去・オランダ移住を決意<sup>51)</sup>。

まず、プチ・ポーローニュを売却、ついで、軍官学校より8万フラン回収。この金、もと、サン・デニ路なるロッターリー事務所をカザノーヴァに保証するもの。かくて、カザノーヴァ、ロッターリーと絶縁。事務所はその事務員に贈与<sup>52)</sup>。

数日後、カザノーヴァ、別離の挨拶のため、シュアズール訪問。最後に、馬匹・車輛・家具を売却<sup>53)</sup>。

ついに、出発の用意方端整備。パリ発。懐中するところ、額面10万フランの優良為替手形、おなじく10万フラン相当の宝石類<sup>54)</sup>。

一論者あり。いわく。

社会的・財政的な面において、パリにおけるこの3年間——1756—59——は、カザノーヴァの生涯のクライマックスを形成する<sup>55)</sup>。

かくて、第三のカザノーヴァは消えゆく。この行、かれみずから叙すること、つぎのごとし。

50) *Ibid.*, pp.448-451.

51) *Ibid.*, p. 453.

52) *Ibid.*

53) *Ibid.*, pp. 454-455.

54) *Ibid.*

55) Hermann Kesten, *ibid.*, p. 257.

時に、1759年12月初日。寒氣凜冽、肌を刺すも、我に備<sup>そなえ</sup>あり。車窓堅く閉ざすところ書を讀むに好適。余、即、エルベシウス著はすところの「精氣論」を繙く……。

(C'était le premier de décembre de 1759; le froid était assez sensible, mais j'étais prémuni contre ses rigueurs. Ma chaise étant bien close me permettait de lire commodément, et je pris l'Esprit d'Helvétius, .....)<sup>56)</sup> (完)

### あ と が き

本稿は、もと、本年6月4日、京都大学経済学会主催の公開講演における拙講のためのおぼえがきに加筆したものである。講演において意をつくすを得なかったところを、いくらかでも、補うことができれば、さいわいである。

しかしながら予想外に長くなったため、時代の照明・史実の考証は、これを割愛するの止むなきにいたった。その結果、「回想録」のぬきがきみたいなものになってしまった。将来、機会があったら、それを、はたしたいとおもうている。

なお、カザノーヴァの「回想録」は凡12巻である。しかしながら、わたくしが扱った版(本稿I、注4)一本誌、96巻1号)は complete ではあるが、6巻のものである。したがって、本稿の引用における *Mémoires*, Vol. III は12巻ものでは Vol. V の後半から Vol. VI にあたるはずである。

56) *Mémoires*, III, xviii, p. 455.